

人ほどのユダヤ人が領事館前に集まり海外脱出を図るため日本の通過ビザを求めた。

当時の日本は人種平等を掲げ、ユダヤ人に対しても差別しない方針をとっていた。しかし集まってきたユダヤ人の大部分はビザ発給に必要な書類や旅費を持っていなかった。着のみのままドイツ占領下のポーランドを脱出してきていたのである。日本の外務省は駐独大使宛に、必要書類を持たない者には通過ビザを与えないよう命じた。杉原は外務省宛にビザ発給の許可を求めたが、当時の通信事情は悪く返電を待つ間正規の書類を持つ者にはビザを発給した。やがて届いた返電は「大集団の入国には公海上、旅客安全取扱上からもトランジットビザ(通過ビザ)といえども発給相成らぬ」であった。

杉原がビザ発給に踏み切るべきかどうかと煩悶する間にも領事館前の群衆は増えてゆき杉原の国外退去の日も近づいてくる。この現状を七月二十八日外務省宛に打電したが返電はない。杉原は「もしビザを発給すると日本とドイツの友好関係からみて自分たちにも危険が及ぶかもしれない」と妻の幸子に打ち明け、遂に二人は最後の決断をした。杉原の手記によると「ユダヤ民族から永遠の恨みを買ってまで旅行書類の不備とか公海上の支障云々を口実にビザを拒否してもかまわないとでもいうのか。それが果たして国益に叶うことかどうか、苦慮のあげく私はついに人道主義・博愛精神第一という結論を得ました。」

こうして一九四〇年七月二十九日朝、杉原は食事の時間も惜しんで手書のビザを書き続け、国外退去の日まで約一か月にわたって発給し続けた。その数二一九枚、約六千人のユダヤ人が生命を救われた。

この件については未だ解明されない謎も多く、その例をあげると、外交官杉原が覚悟した「身の危険」がどの程度のものであったのか、外務省がビザ発給を禁じた真の理由は何か、ナチス・ドイツは杉原の措置をどう考えたか、さらに帰国後杉原が復職できなかったのはなぜか、二〇〇〇年(平成十二年)になって外務省が杉原の顕彰プレートを作った彼の行動を讃えた理由は何か、といったものである。

しかし、杉原がナチス・ドイツの非人道的なユダヤ人迫害を知らないはずはなく、日独伊三国同盟締結を望む日本の現状を忘却するはずもない。外交官の感覚で「危険」を予感した以上、それは重大かつ深刻な身の危険と思わ

れるので本稿で取り上げるのにふさわしい事例と考えた。

民族的規模の死生観というものがあるとすれば、それは魂の歴史ともいえるべき伝統の延長線上にあるだろう。かつて武士は主君への忠誠の証として死ぬことを恐れず、一方で無意味な死を恐れた。そうして武士の榮譽ある死は大衆の支持を得てきた。忠誠に貫かれた死であれば、クリスチャンの殉教も任侠に殉ずる死も支持を受ける。国家への忠節を全うした軍人の死も同様である。釈迦は「生老病死」を人間の四苦だと言った。死はひとしく人間が恐れる。自己犠牲の死が何人も恐れ忌む死にいくらかの意味と彩りを添えるものであるならば、死にゆく者が持っている純粹、切望が永く讃えられる伝統を生んだとしても何ら不思議はない。

参考文献

- 高木俊朗「抗命」文春文庫 '90
 半藤一利「ノモンハンの夏」文春文庫 '01
 同 「ソ連が満州に侵攻した夏」文春文庫 '02
 宮沢賢治「グスコープドリの伝記」岩崎書店 '81
 文芸読本「宮沢賢治」河出書房新社 '77
 遠藤周作「わたしが・棄てた・女」講談社文庫 '72
 遠藤周作「沈黙」新潮文庫 '81
 三浦綾子「塩狩峠」新潮文庫 '73
 有吉佐和子「華岡青洲の妻」新潮文庫 '70
 森鷗外「高瀬舟」岩波書店 '73
 渡辺勝正「真相・杉原ビザ」大正出版 '00

と深く結びつくのは、よく知られた。

一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。（ヨハネ伝第二章二四節）
 という一節にちがいない。

第二に、信夫は祖母と父をほとんど突然に近い形で失った。少年のころから、人の死のはかなさや無常を感じ取っていたであろう、ということだ。それが性急なまでに信夫を有意義な生そしてその裏返しとしての有意義な死に向かわせたのではないだろうか。この世で最も有意義な死、それがキリストの死と結びつくのは、信夫にとってはごく自然であったにちがいないのである。

四

しかしながら、ブドリや森田ミツがそうであったように、クリスチャンではなくても自己犠牲によって他を救うことはできる。ただブドリには仏教を信じる作者宮沢賢治が、森田ミツにはクリスチャンの作者遠藤周作の死生観が投影されていると見るべきではある。

では森鷗外「高瀬舟」の主人公の喜助はどうだろう。鷗外がクリスチャンであったことを示す記録はない。時代設定は江戸時代、場所は京都である。

弟殺しの罪で遠島に処せられた喜助は、高瀬舟に乗せられて大坂へ護送される。護送にあたる役人は羽田庄兵衛。庄兵衛の目には初めから喜助は風変わりな罪人と映った。遠島といえば死罪ではないが、赦免の僥幸でもなければ生還の望みは薄い過酷な罰であった。

高瀬舟に乗せられる罪人は誰もが将来をはかなみ、自らの犯した罪を悔いてやまないものなのに、喜助は妙に明るい表情、というより楽しそうな様子さえ見せていたのである。

見送りに来る家族もないこの孤独な若い男に庄兵衛は深い関心を持ち、大坂までの道中、これまでの喜助の身の上話や弟殺しの経緯をすっかり聞き出すのであった。そこには公儀の役人として安定した暮らしを送ってきた庄兵衛には思いも寄らぬ喜助の人生があった。幼いころに両親が病死、喜助は弟と二人近所の人々の援助にすがって何とか飢えもせずに育ち、働けるようになってからは身を粉にして働いた。もちろん暮らしは貧しかったが、悪に

も走らずまっとうな日々を送った。

しかし弟が胸を思つて働けなくなると、生活を支える金と薬代が喜助ひとりの肩にのしかかり、働いて借金を返してもまた次の借金をして凌いだのである。まっとうに生きていたからこそ借金もできたのだけれど、それにしても赤貧洗うが如しとはこういう暮らしを言うのだろうか、庄兵衛には想像もできない。

しかし、庄兵衛にとっていちばんわからないのは、そんな暮らしを送った喜助が「欲が無く足るを知っている」ことである。幸福の実感を持つて生きることだ。物質的な豊かさなら喜助よりはるかに恵まれている庄兵衛なのに、蓄えもなく、満足感など持ちえない生活を送っているのである。貧しさに屈せず権力におもねらず、理の通った語り方をする喜助が犯した弟殺しの顛末はさらに庄兵衛を混乱させた。

兄の足手まといになりたくないという最後の頼みを聞いて死なせてやったというのだ。これは江戸時代であるから、喜助の脳裏には死罪への恐怖もあり、たった一人の肉親の弟の頼みを聞き入れてやりたい、兄弟愛もあって激しい葛藤が渦巻いていたにちがいない。だが後者が勝ち、喜助はわが命を顧みず決断するのだ。奉行所は喜助を死罪にせず罪一等を減じて遠島に処した。高瀬舟の上で喜助が満ち足りた表情をしているのはわが身を捨てて弟を苦から解放したことへの満足感と、生命が助かって弟の分まで生きられる喜びとによるのだろうか。

五

最後に実在の人物の場合を紹介しておこう。第二次世界大戦中リトアニアの領事代理であった杉原千畝氏である。（以下敬称を略す）

これは歴史上の事実なので時代背景も説明する。

一九三九年（昭和一四年）に始まった第二次大戦のさなか、ヒトラー率いるナチス・ドイツはそれまでの人種差別政策をさらに押し進め、その対象となったユダヤ人は四二〇万人以上とも言われる。多くのユダヤ人がドイツの支配地域からの脱出を図った。このユダヤ人たちを救った一人の日本人が杉原千畝である。一九四〇年六月、ソ連軍がリトアニアに進駐し杉原に国外退去を命じた。領事館閉鎖の期限は八月二十五日であった。七月十八日朝、百

うものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思ってる……。」

作者の遠藤周作は十歳のときカトリックの洗礼を受けたクリスチャンである。この「わたしが・棄てた・女」の他に「沈黙」(昭和四一年)を読んでふと二作に似通っているものがあると感じた。たった二作だけでこの作者のキリスト教に関わる作品群を論じるのは無理だとは思ふ。それを承知で言うのだけれど、第一に、森田ミツも、「沈黙」のフェレイラ元司祭・ロドリゴ司祭もそうだが、魂の永遠の祝福を第一に考える宗教上の原則からは逸脱しており、我々の肉体が存在するこの現世において「救済」を実行している。森田ミツが療養所で無私の態度で患者たちに奉仕すること。ロドリゴ司祭が、今現在逆さ吊りの拷問を受けて苦しんでいる百姓たちのために、自分のすべてを捨てて踏絵に足をかけること。どちらもこの世の出来事だ。特にロドリゴ司祭は、信者のために祈ることや教会の方針や布教よりもずっと大きな愛の行為を成し遂げようとする。ここに作者独特の「愛」の解釈があると思われる。

第二に、どちらにも、神への疑問―神の存在、教義への疑問―が色濃く現れていることだ。森田ミツは子供の患者の死を看取った時、神の存在を否定した。ロドリゴ司祭は、なぜ神が自分を裏切ることになるユダを弟子の一人に加えたのか。裏切り者ユダが血の畑で首をくくるのを見放したのか。答はない。答はないが、森田ミツもロドリゴ司祭も「今まで誰もしなかった最も大きな愛の行為」を行っている。キリスト教そのものへの根源的な疑問の答を保留したままで―。

さて、作家としてキリスト者として、三浦綾子は「自己犠牲」をどう描いているだろうか。遠藤周作が「沈黙」を書いた昭和四一年に三浦綾子は「塩狩峠」を書いている。

これは明治四二年二月末北海道旭川の塩狩峠で、機関車と客車をつなぐ連結器がはずれ客車が暴走し始めたとき、客車に乗っていた鉄道職員がハンドブレーキで客車を徐行させたが停止しないため、自らの体を線路に投げ出して客車を止め、乗客の命を救ったという実話に基づいた小説である。

主人公永野信夫は士族の家に生まれたが、父の影響を強く受けて育ち、封建制による身分上の偏見を持たなかった。当時一般的であった立身出世の道

も歩まず、大学に進まないで裁判所の事務官を振り出しに、二十三才で北海道に渡り鉄道会社の経理係となる。母をはじめ身边にクリスチャンが多く、将来は神学校を出て牧師になりたいと考えていた。

性格は温厚で、勤勉なうえに誠実な生き方を貫いた。職場でも教会でも人は篤く誰からも慕われる。どこかナサニエル・ホーソンの「巖の顔」の主人公アーネストに似ている。人間の罪を一身に背負って十字架にかけられたイエス・キリストとの存在を強く意識し続け、自らの人生を律し続けた。それを証明するかのように、信夫は肌身離さず遺書を持っていた。「余は感謝して凡てを神に捧ぐ。」で始まり、「苦楽生死、均しく感謝。」で終わるその遺書がすべてを語っている。

しかし、作者は信夫を神格化しているのではない。彼は社会的偏見と闘い、自身の肉欲に悩みながら成長してゆくのであって、それはいつてみればいかにして自己犠牲の精神を獲得していったかということへの検証の記録なのである。

「沈黙」の主人公ロドリゴ司祭は布教が幕府に禁じられていた日本に渡って来たほどの人であったから、もとより死は覚悟しており殉教することを恐れてはいない。平生から信者たちに匿まわれて布教を続ける潜伏司祭であった。

しかし「塩狩峠」の永野信夫は明治時代の鉄道員である。徴兵検査も不合格で、危険な戦場とも無縁なのになぜ、平和な日常生活の中で死を意識していたのであろうか。

その答は二つある。

第一はキリスト教の信仰である。明治時代にはヤソ(耶蘇)と呼ばれてキリスト教は差別を受けた。信夫の母もクリスチャンであったため、姑に離縁させられている。父も妹も信仰を持っていた。祖母の死後信夫は父母からはみな神の下に平等なのだと言われていた。急死した父の遺書には、人の死は神の意志だから人はそれを如何ともし難いことが書かれていた。信夫が十才の頃のことである。

士族のプライドを振り回すばかりの祖母とは違って、深く信仰を抱いた父の薫陶を少年期に受けたことが信夫の人生を決定したと言ってもよいだろう。「塩狩峠」の中には新約聖書のことばが随所に見られるが、信夫の殉職

こともなく、ささやかな幸せに満足している娘、それがミツだった。努はやはり貧しい大学生で、これといって未来に希望もなく、大学へ通うより生きるためにアルバイトに精を出すという、これもまた平凡な若者だ。退屈のぎになるかぐらいの軽い気持ちで拾って帰った映画雑誌の投稿欄で初めて森田ミツという娘を知る。彼は最初からミツを欲望のはけ口としか見しておらずミツが困っている人を見ると同情してしまう性格なのを見抜くと、自分の不自由な体を利用してミツの同情を買い、二度目に会った後、彼女を凌辱してしまうのである。そうして彼は敵履のごとくミツを捨てて顧みることとはしなかった。だが、ミツは努を好きだったのだ。

ミツの消息は絶え、努は卒業、就職と順調な生活を送ってゆく。社長の縁続きの同僚とも婚約し将来も保証された。彼の脳裏からミツの痕跡はまったく消え去ったようだったが「ぼくたちがその相手から遠ざかり、全く思い出さないようになって、ぼくらの行為は、心のふかい奥底に痕跡をのこさずには消えないことを知らなかったのだ」と、何度も作者が記しているように折にふれミツの消息は努につきままとつてくるのだった。しかし、ミツに関する新しい消息は、彼女が職を転々とし、それも坂道をころげ落ちるように暗く猥雑な世界へと身を落としてゆく姿であった。

その原因のいくつかはあの、ミツが弱者を放っておけない哀れみと、自分の利益を他人のために投げうってしまう行為にあるにちがいがなかった。だがミツのなめた辛酸はそこにとどまらなかったのだ。手首にできた痣からハンセン病と診断され、人里離れた療養所へ入らなければならなくなる。病気に対する世間の偏見と底知れぬ孤独感に打ちのめされながらも、幼い頃からの習性はミツに過酷な現実を受け入れさせる。

療養所には、ミツと同じようにある日突然社会から切り離され運命を呪った経験を持った人々が大勢いた。しかし彼らには生きることへの渴望があった。みな、絶望の果てに、療養所のスタッフたちの励ましに支えられて少しずつ生きる希望と闘病への意志を得たのだ。「この病気は病気だから不幸じゃないのよ。この病気にかかった人は、ほかの病気の患者とちがって、今まで自分を愛してくれていた家族にも夫にも恋人にも、子供にも見捨てられ、独りぼっちになるから不幸なのよ。」とスタッフは言う。しかしその不幸が患者どうしをつなぐ絆となり、別の意味での幸福を得るのだと、とも言った。

だからミツが誤診だとわかって、療養所を出ることができるようになって、彼女はいったん喜んでもとの世間に戻ったがまた療養所に舞い戻って行くのである。それは患者たちへの憐憫ではなく、もとの孤独な生活への恐れだった。「ミツは真実、今、自分の体を暖めてくれる人をそばに欲しかった。体だけではなく、時には寂莫とした毎日、疲れた自分が頭をそこに靠れさせる母親のような相手がほしかった。鈍い、愚かな自分の愚痴を聞いてくれる相手。石浜朗の映画を見る時、一緒になって笑える友だち。そしてその友だちが一生、自分のそばにいてくれ、離れていかなければいい。そんな暖かい存在が何処かにいないのか」何処にもいなかったのである。努と会えなくなってしまった。ひとりぼっちの毎日があるだけなのだ。療養所で、運命を呪って泣いてばかりいたミツをいたわり、勇気づけてくれたのは患者たちだった。ミツが絶望の底から立ち上がるまでずっとしておいてくれた人たち。同じ苦しみを持っているためにミツの悲しみを深いところで分かちあってくれた人たちの存在がミツの心の中で急に重味を持って来て、ミツは療養所に帰る。患者たちのために奉仕する道を選ぶのだった。それは何の街いもなく、ほとんど自発的に選んだ道であった。宗教的な奉仕精神によって患者を支えるスタッフの修道女たちとは本質的に異なる選択をしたのである。その代償としてミツはふつうの若い娘の持つ自由や欲求を捨てることになる。患者たちが許されていないことは自分もしない。ひたすら、無私の奉仕に生きるのだ。言わば、自分を捨てることで自分を生かす、逆説的な人生である。ミツは療養所ではたいへん異質な存在であったが、彼女は生来、他人の不幸を目にすると同情する以上に「助ける」という行動に表してしまう性格として描かれている。だから苦境に適應できるのだ。

この延長線上にミツの死がある。患者たちが不自由な体で集めた鶏卵を業者に納めようと運んでいたミツはその大切な鶏卵を割るまいとして、バックしてくる車をよけられず轢かれて死んだ。殉職、といってもよいミツの死の意味に作者はふれていない。ミツが生命と引換えにしたものは何だったのか。その知らせを受けた努はこう回想する。

「ぼくはあの時、神さまなぞは信じていなかったが、もし、神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在するということを、人間にみせたのかもしれない。理想の女とい

ブドリはイーハトーブ火山局の技師である以上、科学者である。それならばブドリの英雄的死は科学的に回避されなければならない。技師がその生命を犠牲にする以外にカルボナード火山を爆発させることができないとしたら、それは科学の限界であり敗北である。乗員の誰かが生命を犠牲にしなれば地球に帰還できない宇宙船など、科学者が作るだろうか。科学技術が未熟でないならば、人間の幸福に奉仕するべき科学が人間の生命よりも上位に来ることはないはずだ。ブドリの死はなにか、宗教的な祈りにも似た自己犠牲的精神を感じさせる。彼は技師となった日から二年、「夜も昼も一心に働いたり勉強したりしました」また潮汐発電所が完成すれば早魃もなくなるという胸をわくわくさせる青年である。献身、という言葉がよく似合うし、求道者と言ってもよいだろう。老技師に敬意を払い、私利私欲がないばかりか自身の生命をも顧みない潔さ、イーハトーブの人々の幸せだけしか眼中にない一途さ。人類史上に名を残そうなどは微塵も考えない無私の心をブドリに見出すとき、「ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニワタシハ ナリタイ」(「雨ニモ負ケズ」)と詠んだ賢治がそこに重なってきてならないのである。

しかし別の見方をすれば、なぜブドリが命がけの任務を志願したのか、という問いに対する答が作品には出てこない。これが書かれたのは賢治の最晩年であり、その頃の彼の病気は一進一退を繰り返している。そういう肉体の衰えと仏教への帰依とが、価値ある死、いや死そのものを身近で甘美なものと考えさせていたのか。まだ若いブドリがなぜ死の任務に固執するのか。

つけ加えるならば、冷害を克服しさえすれば東北の農民は幸福になれたのか、という点も疑問である。大多数の農民は小作農であり高い小作料が農民を苦しめていた。冷害だけが農村疲弊の元凶ではなかったことは明らかなのに「グスコブドリの伝記」にはそういう社会的現実が書かれていない。そこに背を向けた以上、この作品は童話のかたちを取らざるを得なかったのではないだろうか。

本稿は作品論ではないのでこのあたりにとどめておこう。ただ、本稿のテーマは主體的意志によってなされた自己犠牲を求めることであるから、それを描いた作品がフィクションかそうでないかということはまったく関わりのないことなのである。ブドリの死が自己犠牲にあてはまること、それを確認

できればそれでよい。

一身を投げ打って農村を救う、といって思い起こされるのは江戸時代下巻国佐倉の名主、惣五郎である。惣五郎についての史実はほとんど残っていないが、義民伝承の形で今なお地元で伝えられているという。「国史大辞典(吉川弘文館)」によれば、惣五郎は佐倉城主堀田正信の課した重税のため困窮した農民の代表として領主に直訴したが聞き入れられず、ついに上野寛永寺で將軍に直訴したので租税は減免された。しかし当時の掟法にもとづいて惣五郎一家は処刑されたという。事の正否に関係なく直訴した者には厳しい処罰が下ることは当時の農民ならば知っているはずである。そうでなければ、農民対領主の諸問題を解決するための最終手段として有効性を持つことはないからだ。したがって、惣五郎の行為は弱きを助け強きを挫くという「義」のために身命を賭けた、勇気ある自己犠牲と考えてよい。

三

小説のなかで自己犠牲が描かれた例としては、遠藤周作の「わたしが棄てた・女」が挙げられる。吉岡努・森田ミツ、二人の若者がたどった人生を、努の場合は手記の形で、ミツは作者が語る形で、平凡だがけつてありきたりではないそれぞれの人生を淡々と描いている。資産家の生まれでもなければ特別な才能があるわけでもない。誇れるような容姿も肉体も持ち合わせていない。いやむしろ努は小児麻痺の後遺症で右足が少し不自由だ。

ミツはその名前からして垢抜けない女の子で「場末の駅前マーケットで売っている柿色のスエータに黒いスカートをはいている。そのスカートの下でだらしない横じわが靴下によっているのは、きつと膝の上でゴムバンドを使つてとめているからにちがいがなかった。東京の場末のどこにでも見かけられる顔の女の子だった。玉つき屋やパチンコ屋でよく店番をしている女の子、日曜日になると割引の映画を見にいき、インキくさいプログラムを大事そうに持つてかえる女の子」だった。父の後妻には三人の連れ子がおり、ミツは自分がいるとこの母が幸せにならないのではないかと感じて川越のその実家を出て東京で一人暮らしをしている。従業員が六人だけの小さな薬と石鹸の工場で、ミツは事務や使い走りの他、薬の包装を手伝う。夜勤の場合は石鹸の包装もする。こんなつましい毎を送る娘、貧しいけれども見栄を張る

に回っていた。

角田房子「一死大罪を謝す」に描かれたように、敗戦の責任を負い割腹して果てた陸相阿南惟幾。半藤一利は「日本のいちばん長い日」でこの阿南の死は天皇がポツダム宣言を受諾して連合軍に無条件降伏するのを阻止しようとする陸軍の若手将校の暴挙をくいとめるためでもあった、という。諫死ともいおうか。

古くは平手政秀もそれと似ている。彼は織田信長の傳（もりやく）であったが、信長は十八才で家を継ぎみずから上総介と称した頃「好んで異様な風体をし、粗暴な振舞が多かったので『大うつけ者』の評判が高く、傳の平手政秀は死をもって諫めた。信長も深く悔悟し、政秀の死をいたんで、政秀寺を建て、菩提を弔った。」（国史大事典 吉川弘文館）

しかし非情なタテ社会にあつて、こういう自己犠牲は稀であった。たいていはどのような命令をも甘受することで忠誠を示したからである。上意下達の組織における命令は絶対であつて不服従には制裁が待っている。だがそうだからこそ、周囲との軋轢に屈せずなされた犠牲的行動に対し、私達は賞賛を禁じ得ないのではないだろうか。

繰りかえすが、命じられて生命を捨てるのは私の定義では自己犠牲の行為ではない。たとえば昭和十九年十二月以降、日本軍部は二五〇〇人以上の若者たちを最終兵器として組織し体当り攻撃を命じた。一機一艦の必殺攻撃として連合軍、特にアメリカ軍の将兵を恐れさせた神風特別攻撃隊である。れつきとした軍事作戦である。形式上は志願に基づく部隊編成であったが、実質は御国のために死んでくれという命令以外の何者でもなかった。死を前提とした作戦など、専門家の間では作戦と呼ぶに値しないものだが、これは敗戦まで続き、多くの若者があたら若い命を散華させた。

なぜこのような自殺攻撃（アメリカ軍の命名）が可能であったのか、日本人独特の「集団的規範に殉ずることの美学」とも言うべき死生観を知らない者には解けない謎であろう。

日本人の心性を語るとき、この「自己犠牲」と「仇討ち」とがひじょうに重要なキーワードなのである。

（注1）見田宗介「近代日本の心情の歴史」（講談社学術文庫）

二

それでは私の定義にあてはまる「自己犠牲」を挙げてみよう。

宮沢賢治は誰もが知っている、農民であり、詩人・童話作家でもあり「篤志の人」である。昭和八年に三八歳の若さで病没したが、その前年、「児童文学」に『グスコープドリの伝記』を発表している。この作品は童話ふうにし書かれてはいるが、その実、イーハトーブにある三百余の火山の活動を監視するイーハトーブ火山局があり、海岸沿いに二百もある潮汐発電所、窒素肥料を含んだ雨を降らせる実験など賢治の科学的知識が盛り込まれている。これは童話風SFと呼ぶべきかもしれない。

ブドリはイーハトーブ火山局の技師となつて活躍し、二七歳のとき冷害克服のためにある重大な決意をする。恩師のクーボー大博士は、カルボナード火山島を人工的に爆発させることができれば二酸化炭素のガスが地球全体を覆つて平均で五度気温を上昇させることができる、というブドリの理論を承認する。しかし、それを実現させるために、最後まで残る者は生きて帰れないのだとブドリを諭す。ブドリはその任務は自分が最もふさわしいと主張する。博士はペンネン技師に相談するように言い置いて去つてゆき、この老技師は自分が行くからとブドリを引き止めるが彼の意思は固く、遂に技師はブドリのカルボナード決死行を認める。火山島に残つたブドリの生命と引き換えに冷害は回避でき、イーハトーブに豊作がもたらされた。

作品にたびたび登場している「恐ろしい寒い気候」と、賢治の故郷である岩手県花巻市をはじめとする東北地方の農民を悩ませた冷害とを重ねることは許されるだろう。賢治の生涯は「サムサノナツハオロオロアルキ」（「雨ニモ負ケズ」と謳われる、冷害との苦難に満ちた闘いに明け暮れた一生であった。決してブドリのような英雄的な人生ではなかったし、本人もまたそれを望んではいなかった。しかし、彼の「グスコープドリの伝記」や「春と修羅」収録の数々の詩に見られる科学的知識は、冷害という巨大な自然の猛威に立ち向かうためには地質学・気象学・肥料学・農学といった科学が絶対不可欠であると賢治が信じて疑わなかったことを物語っていると考えられる。

また一方で、自然に対す科学の限界を認めることもまた「科学者の態度」であるから、童話仕立ての「グスコープドリの伝記」が成立したのではないだろうか。

「自己犠牲」の系譜

神谷正彦*

History of Self-sacrifice

Masahiko Kamiya*

一

日本古来のよくある言回しといえば、「身を捨つ（捨てる）」が浮かぶ。一身を投げ出して顧みない、という、これはもうものの考え方というより一人の人間の生き方を表わすといった方がいくらい相当に深く重い心のありようを指している。身を捨つ、と言って出家することを意味する場合もあったけれども、出家は自分ではもう人生の進むべき道を切り開くことができなくなったとき、絶望して仏の慈悲に縋ろうとするものであっていわば自分を救済するための行為であろう。

私がここで述べようとする「身を捨つ」は文字どおり、身命を投げうって他を助けることである。自分以外の何か、わが子や親友のようなかけがえない人々を救うために、あるいはもっと広く日本人のため、さらにはこの地球上の人類のためにわが身を犠牲にするという生き方だ。自分の命を鴻毛のごとく軽く扱うなどということは、民族を代表するほどの信仰を持たず、祖国という心のよりどころが稀薄な現代の日本人にはいささか理解しにくいかもしれない。

しかし、一日にして成ったような民族などどこにもない。日本人として、その歩んできた歴史のなかには、一身を捧げて何事かを成す生き方やそれを美しいと受け止める心情があったはずである。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」のように。

見田宗介はそれを「幸福追求という自己内在的な価値を振り捨て、集団の

持つ価値基準の中に自己救済を見出す義侠・仁侠が民衆にとっては信仰と機能的等価となることを意味する。」と述べている（注1）。ここで言う「自己内在的な価値」の究極が自己の身命であることはよしとしても、「集団の持つ価値基準」それは掟であるが、それが行動原理となるとすると、武士や軍人も含めて考えなくてはならない。残念ながらそれはあまりに広大なカテゴリーを必要とするので、このささやかな論考の手に余る。

したがってここで目指す「身を捨てる」という行為を定義しておくことにする。それは「自己に内在する価値基準にもとづいて、自発的意志によってなされた自己犠牲、すなわち、自己の身命を投げうって他を救おうとする行為」ということである。自分の属する集団のルールが犠牲を強制したりまた暗黙のうちに求めたりする行為は、個人の側には選択の自由がないのだから、当然除外される。武士しかり軍人しかりである。

昨今世界を震撼させている、イスラム原理主義者による自爆テロも含まない。

では「自己犠牲」というときの「自己」とは何か。もし「自己」を自分自身のみならず自分の家族も含めて広い意味でとらえれば、華岡青洲（一七六〇—一八三五）の場合はその例になる。彼は妻や母の体を実験台にして全身麻酔薬を創った。しかし時は江戸時代で封建社会であった。彼の妻や母が華岡家の家名のためという自発的ではない理由で治療者になった可能性もある。ちなみに有吉佐和子「華岡青洲の妻」では、妻と母とが互いに張りあつて実験台になったという設定にしている。真偽のほどはわからないが、自発的意志かどうか疑問が生じるようなケースは除くことにする。また「自己」はあくまでも自分自身にとどめておくのが無理のないところだろう。

なお、武士や軍人にとって命令がすべてであったというのではない。主君や天皇や上官の命令というものは時には不条理極まりないこともあり、命令を否定する「抗命」もあった。いっぽう、確固とした命令が与えられなくても部下が主君の意を汲んであるいは勝手に「大義」を作り上げて行動することもあった。たとえば太平洋戦争を拡大させる原因となった関東軍の中国侵略も、実は現場の暴走を大本営が追認する形をとっている。命令が後手後手

*総合教育科

平成十七年九月七日受理